

(発表原稿) 絶対平和を目指す弁証法的行為の方位

(氏名と所属) 川島焔三 津山工業高等専門学校名誉教授

田辺元の「懺悔道としての哲学」の「序」の最後の段落に「絶対平和」という言葉が使われている。①この「序」は1945(昭和20)年10月に書かれたものである。これは原爆投下という人類初めての暴挙に対する人類最初の悲痛な叫びであった。西洋の列強の植民地政策に対して「種の論理」を掲げて日本民族の団結を呼び掛けてきた田辺は、日本国の思想的指導者として、戦争への突入だけは避けたいと思いながら、太平洋戦争への突入を心ならずも容認しなければならなくなった。数学や物理学にも大変詳しく、彼は当時の自然科学がどんな状況であったかをよく承知していたが故に、量子論と相対性原理を絶対無の媒介に転じ、弁証法的な実験が間近に原子の威力を実証することを予感していた。②この原子の威力を戦争の道具にしてはならないと考えていたからこそ、彼は西田先生にお願いしてでも、戦争への突入だけは避けようと奔走した。③しかし突入してしまった。

人間のあらゆる活動を含めて大自然の状態を正常な状態に維持することが絶対平和であるとするならば、放射能汚染や大気汚染や海洋汚染や異常気象のない住みやすい地球環境を維持することが要請される。哲学は絶対を求める学問であるという田辺は、それぞれの学問をコントロールする知恵を哲学が引き受けなければならぬと考えている。④それぞれの学問は独自の領域と原理・原則を持ち、分野ごとの歴史がある。それぞれの学問は細分化が進み、同じ学問分野でも、単独の個人では全体を見渡すこともできない程に進化している。そこに客観的で普遍的な原理が如何にして可能かという全く新しい問題が生まれてきた。⑤

田辺の「哲学入門」はそんな学問原理を整理するために、戦後、俗界から北軽井沢の大学村にひきこもり、訪ねてくる弟子たちに講義したものである。細分化が進み無数の領域を持つ学問が開発されようとしている現在、客観的で普遍的な知識は如何にして可能かという課題が全く新しく問われている。そのような状況にある学問に共通して言えることは、その求める方向が「公」の利益のためであり、「他者」の利益のためであり、「私」つまり「自分」の利益のためではないということである。

人はこれまで、自分が生きるため、自分の利益になるものを求めてきた。その結果が世にも悲惨な原子爆弾だとすれば、既にその方位は否定され、「絶対平和」への道が求められ始めたことになり、そのための方策が求められていると考えるべきであろう。それは「他者」のため、「公」のための行為を優先すべきであることが弁証法的に生れてきたと言っても良い。

人は生きることに於いて様々な欲望を持ち、生きるために他者を犠牲にしてでも、自分が勝ち残る方策を求めてきた。しかし「絶対平和」への道は欲望をコントロールする知恵を育てることが求められる。これは困難な道ではあるが成し遂げられなければならない道である。さもなければ人類は自滅することになる。そうならないための方策を探さなければならない。

1. 行為の行信証⑥

人はこの世に生まれてきたら、何らかの痕跡を残す。ほんの少数の限られた人の心に深い想いを残す人もいるでしょう。沢山の書物を書いて、沢山の人の注目を受け、尊敬の眼差しを受ける人もいるでしょう。様々な政治活動や社会活動をして社会のために頑張った人もいるでしょう。そして様々なスポーツを通じて、人々に勇気と元気を与えてくれる人々もおられるでしょう。音楽や絵画や焼き物に人生をささげた人もおられます。また反対に殺人や盗みや誤魔化しや詐欺をする人もいるでしょう。その一つ一つの痕跡はその人の行為と考えられる。その行為のすべてが全体として救われる道が神の道であり、我々の目指している絶対平和への道であり、それが確かに存在していると確信できる道を探さなければならない。これが本当の意味での世界の創造である。人が何を行い、何を信じ、何を証明するかは一人一人の行為の総和になる。

行為はそれぞれの時点と場所での行為であり、行為する時点と場所に置かれた主体がその時その場で何を目標

してその行為をしたか(行)はその人が信ずる方向(信)において証明されたかが問われること(証)になる。人に悪戯や意地悪をして、誰かを悲しめたとしたら、その結果がなんらかの形で悪戯や意地悪をした人に跳ね返ってくる。それがどのように跳ね返るか、神のみぞ知るということで、我々の予測を遥かに超えたものであることも多い。⑦また他者のために良かれとして行為したことは、必ずしも歓迎される事にはならないことが起こったりもする。それが明確になった時には、礼儀を尽くして謝罪しなければならないが、その解釈において個人間に感覚のずれがあり、それがまた争いの元になることもある。⑧

地球上では様々な民族が生活しており、国というシステムを作り、國民を統治している。その統治の原則を何に置くかはその時々々の為政者の考え方による。その考え方を國民に示すためには、その考え方に反しないような同一性の論理によって貫くことが肝要である。何故ならば原則が定まらなると、その時々々の都合によって変わり、その方向が定まらず、國民を指導することができなくなるからである。しかしそこに弁証法的行為を含む論理を許すと、統治は一段と複雑になる。⑨

その時々々の為政者の方針に反対する意見を含むことが弁証法的な論理であり、多数決による決済が行われることになる。今日の地上の国々は皆その多数決の原理を一応採用していることになっていると考えられる。多数決は純粋な論理よりも個人の損得で決められることが多いので、そこには果てしない損得合戦が展開される。デマを意図的に流したり、金で買収したりすることが起こる。しかし個人の損得ではなく、純粋に公共の利益を優先させることを論理的に導き出す知恵を獲得することが求められ、確立されなければならない。田辺は常にその方向で思惟して、その方向で思惟する後継者のための踏み板になろうとして来た。⑩

2. 田辺哲学の「種の論理」⑪

「類種個」は一般的な形式論理では人類・民族・個人を当てはめることができるが、「種の論理」においては、人類と個人の間と考えられる様々な中間集団が考えられている。民族でもあり、国家でもあり、政党でもあり、会社でもあり、組合でもあり、何人かの個人が集まって纏まった集団を考えることもできる。個人はその集団を通して人類という普遍に繋がっていると考えられる。そしてある個人は自分が属する集団の問題状況において、個人として信じる願いを如何にして実現するかという行為の方向性が問われる。人はそのような問題状況を抱えている中で、悩み苦しき、事によったら死を覚悟することもありうる。⑫その中間的問題状況が個人の行動において如何に位置づけられるかは常に弁証法的に理解されることになる。田辺元は「種の論理」を提唱した頃には日本民族が形成していた当時の大日本帝国の一機関としての京都帝国大学の哲学科主任教授であった。その立場は個人的な生活の状況から国家の思想的指導者としての立場を含んだ状況があり、その立場で発言し行動している。どんな個人でも生まれてからこのかた、体験した経験をもとにして行為する。何らかの集団を形成している個人はそのような別々の個人である。⑬

「種の論理」のキーポイントは理想型としての兄弟愛を中心とした民族としての統一を考え、その兄弟愛を極限まで実践することが要請されている。神風特攻隊の精神もその延長線上にあった。しかし天皇の玉音放送によってその兄弟愛の意味ががらりと一変した。その兄弟愛は戦争に勝つためではなく、絶対平和を目指すものでなければならない。そうすることが絶対平和を可能にするとの論理である。それが可能であるかどうかはひとえに一人ひとりの行信証によって決定される。

3. 個人主義(究極的な基本的人権)の徹底⑭

自らの体験を背負いながら生きているそれぞれの個人は、他者と区別されながら、その人のみの人生を生き抜く権利がある。そのような個人が集団を形成していると考えれば、その個人は生まれた時から可能な限り最大限その能力がその集団において尊重されなければならない。誰かの我が儘でそれが阻害されるとすれば、それは絶

対平和を目指す弁証法的行為の方位の原則に反する。

人は誰かの願いを踏み板にして自己実現をすることがある。それは願いを繋ぐことであるから、普遍性への入り口になる。⑮しかし最初の願いが利己からのものであると確定するとすれば、その願いの連鎖は全体として否定されなければならない。

その願いが利他からであるかどうかは必ずしも明確ではない。表面的には利他であるかのように見えても、実際は利己からの行為であることもしばしばある。それは弁証法的な行為の連鎖によって確認される。ある段階での確認は必ずしも普遍的であるかどうかは確定できない。⑯

他者や公の利益になる行為は他者や公の喜びになり、反対に害となる時は悲しみになる。喜びは愛に、悲しみは怒りに代わり、同調と反発に変わる。同調は平和に、怒りは戦いになる。どれだけ多くの人々に喜びや悲しみを与えるかによって、平安と不安のバロメーターになる。現実はその緊張状態にある。⑰その緊張状態の中で個人の尊厳をどこまでも守り抜くことが絶対平和への条件である。

他者や公の利益を犠牲にして、自己の利益の追求にのみ走るとは利己主義であって、個人主義ではなく、公を含めて自分も他者も喜び合える道を互いに求めあうことを競い合うことが真の個人主義の徹底である。それが究極的な基本的人権の確立となる。⑱それが愛によって結ばれる究極的な理想社会への第一歩である。その第一歩を踏み出すことができれば、絶対平和への道も単なる夢ではなくなる。

4. 絶対媒介の世界⑲

絶対媒介の世界とは悟りとしての絶対矛盾的自己同一に一度到達し、絶対無の境地に入り、普遍的な愛に目覚め、その普遍的な愛の実践として行為する実践の場である。⑲その実践の場は常に弁証法的に展開される。普遍的な愛の実践とは他者の利益と公の利益を優先することである。その行為は行為する主体の意図が十分に汲み取られるとは限らない。どんな反応をも覚悟しておかなければならない。⑳

そんな愛を信じない人にそのような行為をしても、無視されるか、逆に誤解して攻撃され、その意図を十分に伝えること自身が難しい。それでもそれを観察している人がいれば、また異なった反応もありうる。㉑そのような行為の集積により、普遍的な愛の世界は極めてゆっくりと拡大する可能性を持っている。革命とは急激にやってくる社会的変化であるが、絶対媒介の愛の世界はゆっくりとやってくる着実な変化である。ある時のある場所で起こる事実は起こってしまえばその事実は変わることはないとしても、その解釈はその視点によっては変わることもありうる。その最終視点ではすべての事実が救われる世界が神の愛を信じる世界である。

仏蘭西革命とか、第一次世界大戦とか、ロシア革命とか、第二次世界大戦とかは、歴史的な必然としか言いようがない。そしてこれまではそのような事件を通じて人間の世界は成長してきたとしか言いようがないが、絶対平和を目指すことに気付いた今は、そのような犠牲なしに徐々に改革をして行く方策が可能になってきた。㉒暴力的に急がないこと、絶対無に到達すること自身が至難の業であるけれども、すべての人類がいずれ到達すべき人類の理想でもあり、神の絶対還相の姿でもあり、すべてがそこに収斂すべき世界であり、かかる姿においてのみ神の存在を信じることのできる世界である。

5. 懺悔道と精神障害の克服㉓

人は時に過ち(罪)を犯す存在である。意図的に不正をすることではなく、その場の雰囲気のみ込まれて過ち(罪)を犯してしまったことに気付くことである。その過ち(罪)の理由が主体的に明確になった時、反省的思考を通じて懺悔に至る。それは小さな行為から国家社会の英断に迄至る。その反省的思考が明確にならない時、極端な場合精神障害の様相を呈してくる。㉓

田辺哲学における「種の論理」から「懺悔道」への道は西洋列強の植民地政策に対する日本民族としての独立

心から生まれた歴史的必然でもあった。その精神的構造は個人が時折起こす精神的構造と同じである。その解決の道が容易に見えてこないとき、人は様々な精神障害の状態に陥り、様々な症状を表してくる。その症状がいかなる構造から生まれて来たのかが本人に明確になりさえしたら、人はその症状を克服することができる。②⑥例えば真珠湾攻撃を敢行した山本五十六元帥の決断はその決断に関して一点の曇りもなかったのではないか。原爆投下を決断したトルーマン大統領もその決断に関して一点の曇りもなかったのではないか。それは当時の国際状況の中にあってはそれ以外の選択肢がなかったと判断したのであると考えられる。しかし視点を変えれば大変な大罪である。それが大罪とならないのはその時の社会状況がそれを肯定して歓迎していたからである。恒久平和を考えていた田辺はどうかして平和を維持し戦争にならないように「種の論理」を考えていた筈である。②⑦それにもかかわらず日本民族の士気を高める結果になり、軍部の独走を許すことになった。何という矛盾であろう。

田辺における「種の論理」の危機は天皇を中心とした日本民族の危機であり、田辺自身の自己崩壊であると共に、人類自身の自己崩壊を意味していた。それは絶対平和を目指す以外に道のないことを自覚することに繋がった。そう自覚することによって、始めて懺悔道が成立する。その成立によってさまざまな障害を乗り越える根拠とその方法が生まれる。

6. 世界の創造と発達障害の意味②⑧

田辺哲学における懺悔道は田辺個人が自らを客観化して表現したものである。その懺悔道を通して絶対平和を目指すことになる。我々人間一人一人は、田辺が明治の中頃過ぎに東京の名門の家に生まれて太平洋戦争の真っただ中で、精も根も尽き果てる如くに悩み苦しんで懺悔道にたどり着いたように、②⑨自らの生を生き抜くべく世界の創造に参加しているのである。世界の中のこれからの自分は世界を創造する事を自らの行動を通して証明することであり、自覚したその瞬間から世界を自ら積極的に創造することになる。

人は自分の人生を自分自身で自覚する前に、様々な紆余曲折を経て本来の自分に到達するものである。それでも大凡の平均値があって何歳までに歩けないのは何等かの意味で発達に障害があると言われるように、運動能力や理解力や行動のパターンから、様々な意味で発達障害が考えられているが、自らの人生を生き抜く自覚に迄達して初めて一人の人間になる。③⑩

自らの人生を自らの力で生き抜くことが可能になった時、人は自分を中心とした世界の展開を思い描くことが可能になる。互いに協力可能な人と結びつき、互いに相反する場合には敵対関係になる。絶対平和を目指す世界の創造は対立関係を作らず、すべての人とすべての集団と協力関係を築くことに外ならない。そんなことは不可能だと思われる人もおられるかも知れないが、それを可能にする智慧が田辺哲学の懺悔道なのである。そのように理解できない人がいるとすれば、その人こそ人類の理想を理解できない発達障害なのである。③⑪

7. 自己自身の観察と実践②⑫

最近男女の区別だけではなく、LGBTという表現を加えることが一般的になりつつある。それだけ性の問題が重要視されてきたということでもある。この問題は必ずしも先天的に決定されたものではなく、生まれた後からの人生経験によって徐々に自覚されるものとの判断を重視する必要があることが叫ばれてきたからである。

③⑬

また戦前の男尊女卑から戦後の男女平等の原則への社会的な変化の落差は、個人的な意識の変化と習慣の名残が個人の意識に微妙な影を落とすことになり、様々なトラブルの原因にもなってきた。③⑭それは男女平等の原則が誰にでも同じように受け入れられたわけではなく、社会的には男尊女卑の習慣が色濃く残ってきた個人や地域があることを意味している。

そのような変化の中で筆者は男として男女平等の原則を出来るだけ貫くべく実践してきたように自覚してい

る。しかし男尊女卑の習慣が色濃く残っていた戦後の日本では、男性の優位があり、個人的にはそのような風習の中で得をさせて頂いたかもしれない。そんな中で、“男とは？” “女とは？”という根本的な疑問が消えないまま、人生の終焉を迎えようとしている。これはアダムとイブ以来の神の創造の意図にもかかわる人生の根本的な問題かもしれない。③⑤

80年を超えた人生において、実際の生活の中で筆者は現在の妻に男にしてもらった以外に、何人かの女性にご迷惑をお掛けしながら、いくつかの人生の原則を立て、それぞれの時点で感じたことを文章にして、自分なりに納得する生活を実践してきたように思う。③⑥筆者の人生は筆者が選んだたった一つの実験である。そしてその評価については筆者の知るところではない。しかし今からでも間に合うのであれば、指摘して頂き、改善することを試みることは吝かではない。人生の評価は主観的なものが客観的になることが望ましいが、その判断は他者に委ねるのが筋である。

8. 自然現象の観察と実験③⑦

現在は自然環境についての様々な膨大な観察記録がある。動植物から地球環境や地球の歴史・大宇宙の歴史迄含めた様々な観察記録があり、それぞれの分野ごとに客観的で厳密な記録があると思われる。観察記録を厳密に検討することにより、新しい可能性を開くために様々な実験を行う。そして様々な自然法則を確定し、人間生活に役立つ新しい法則や物質や道具や機械を発明して来た。このように科学技術の進歩は目覚ましく、宇宙の誕生までシュミレーションすることが可能なように聞く。あらゆる分野での有難い成果を頂いてきた。

しかし原子力利用の問題だけは根本的で究極的な問題を人間に突き付けている。原発の安全性だけは素人目にも何処まで行っても確定できない問題が残る様に思われる。古代ギリシャのエレア学派と原子論者の対立は存在と無の対立でもあり、思考と感覚の対立でもあり、極微の世界と極大の世界を融合させる問題でもあり、自然法則の観察とその観測を基にした巨大な実験の問題でもあり、人間の行為が加わらなければ決して起こりえない問題でもあり、人間が神に代わろうとする傲慢さの表れでもある。火力発電、水力発電、風力発電、太陽光発電までは自然現象を巧みに利用し電力に変える技術を開発してきたが、原子力発電だけはリスクが大きすぎるように思われる。例えば大気のエネルギーを電気に変える風力発電の原理を根本的に見直して、台風のような巨大エネルギーを電気エネルギーに変えられないだろうか。③⑧

光速を超え瞬間移動が可能なような夢が文学の世界に影響し、そこでドラマが展開されるようなSF小説やアニメ映画が生まれて来たようである。しかし科学的に自然現象を観察することは文学の世界におけるような自由な発想と共に厳密な装置と計算が必要であり、物理的に時間や空間を超えて飛躍することはできない。悟りの世界は瞬間的にやってくる意識の転換であるが、時空を超えて瞬間的に物理的に証明することは不可能である。つまり科学的に証明することは不可能なこともあることを了解しなければならない。③⑨

また大気汚染や海洋汚染や異常気象やプラスチックごみ問題や放射能廃棄物問題なども今日は困難な問題として対策が急がれている。生物学・化学・物理学・気象学・地質学・数学などの専門家が総力を挙げて対策を検討すべき時が来ている。科学的な成果ばかりを強調しすぎることなく、そのマイナス面にも開発時点で常に配慮することが必要だった筈で、その検討が後手に回ってしまって居るくらいがある。大気汚染や地球温暖化やプラスチックごみや放射能汚染など、その深刻さは重大問題である。

今日の世界の動向は、経済的な発展のみが強調され、科学のプラス面ばかりが歓迎されすぎている。今大問題になっているコロナウィルス問題を契機にして、科学のプラス面とマイナス面をあらゆる観点から再検討をして、安全な道を発見する様に、根本的な方向転換をするべき時がやって来た。経済優先の資本主義・社会主義は総じて懺悔すべき時がやってきたのである。④⑩

9. 社会現象の統計と社会改革④①

「産めよ、増えよ、地に充ちよ」④②と言われながら、多くの民族はこの地球上でその勢力を拡大してきた。筆者はそんな時代の帝国主義華やかな頃の最終段階で、群馬の片田舎のどん百姓の三男としてこの世に生を受けた。祖父母や両親はそんな筆者にどんな願いを込めたのであろうか。そんな願いと筆者とは全く無関係ではなかったように思われる。④③

今は地球上の人口が80億人程と言われるが、地球は多くの人間によって占有されつくし、これ以上の人口の増大と文明の維持は様々な弊害を増大させ、新しい弊害をも引き起こしかねないことが懸念される。その一人ひとりにはそれぞれ先祖代々の願いが込められている。本人がそれを自覚しているかどうかは別として、そのような関係が地上の様々な現象と関係していると考えられるべきであろう。

日本民族は減少傾向にあり、民族としては衰退する傾向にあることを心配する人たちもいるが、これからは民族の繁栄よりも個人の能力の最大限の開発に力点を置いていく時代になったのではないか。地上の土地の分捕り合戦はほぼ終わったのであり、今の勢力図によって分捕り合戦は止めにし、個人の能力開発に力を入れることが大切ではないかと筆者には思われる。④④

今日、地上の勢力図は資本主義国と社会主義国に大別され、少しでも自国の優位を獲得すべく互に凌ぎを削り合っている。人口・生産力・資本力・利益率・支持率・幸福度などすべては統計的に処理され、少しでも数字を上げるべく様々な集団がひしめきあい宣伝し合っている。具体的な個人の具体的な問題意識は表面化しにくい。何か目立ちたい人は人目を惹くことをすることになり、テレビやラジオやパソコンやスマホなど通信機器を利用してその競争をする。そこで大ブレイクすることが人生の目標であるかのようなのである。しかし一方でパワハラやセクハラがはやり、片隅に引き込まらざるをえない人々も沢山いる。他を蹴落とすのではなく、他と協力して互に成長しうる能力を育てるべきであろう。④⑤

人を蹴飛ばしてでものし上がろうとする人々と片隅に追いやられても人に危害を加えないように決意している人々は人生観が正反対なのかも知れない。前者は性悪説を取り、後者は性善説をとっていると考えられる。人の性は善か悪かとは古来決着のつかない問題だが、皆で善にしていこうという決意をする時期が来たのではないか。そのためには社会制度を根本的に改革していかなければならない。④⑥

8. 絶対平和を目指す弁証法的行為の方位④⑦

性善説に傾く人(A)を性悪説に傾く人(B)は信用しない。何故ならば、そんなきれいな事ができる筈が無いと思っているから、そうでないことを弁証法的に証明するために、BはAをトコトン追い詰め、AもBであることを証明しようとする。それは時に残酷な様相を呈する程にもなる。反対にBをAは簡単に信用してしまう傾向がある。何故ならば、人の悪意は信じたくないと思っているから、見せかけの善意でも簡単に騙されてしまう。今日日本社会で横行している「振りこめ詐欺事件」などその典型である。日本の現実の社会は今どちらかという性悪説が優位にある。この状況は絶対平和を目指すには困難な状況にあることになる。もっと他者への眼差しを優しくして行かなければ絶対平和など夢のまた夢である。

絶対平和など無理だと初めから諦めるのではなく、皆で実現しようという総意を作り出すことが第一に重要である。そのことを田辺は天皇の玉音放送から2ヶ月ほどして表現したのである。その時は既に定年退職をしていたので、一国民として表現したのである。④⑧

その発言は我々一人一人がどうするべきかを考えなければならないことを田辺は全人類に問いかけ、要請している。とすれば筆者は日本国民の総意として「公」が性善説を採用することを宣言することから始め、その上に立って性善説を原則とした法律の根本改正をしなければならぬと考えている。④⑨そうすることによって日本民族は近隣諸国に多大なる犠牲を強いて太平洋戦争を戦ったことの懺悔を実行することができる。そうすることに

よって初めて日本民族は人類の平和への橋渡しをすることが可能であるとする。⑤

註①：「人類は総に懺悔を行じて、鬭争の因たる我性の肯定主義を絶対無の媒介に転じ、宥和協力して解脱救済へ相互を推進する**絶対平和**において、兄弟愛の歡喜を競い高める生活にこそ存在の意味を見出すべきではないか」「田辺元全集」(筑摩書房)第9巻14頁。以下田辺の著作の引用は【IX14】の様に表記する。

この引用文は異なった観点からの論文「田辺哲学における第三の道<人類哲学の道>とは何か?」(「求真」第25号で論じたもので、筆者の社会に対する遺言のつもりで書いた)の中心的な文章である。この論文を書いた後で**絶対平和**という概念の深さに気付いたと言っても良い。

註②：筆者は数学や物理学を苦手をしている者だが、核分裂とか核融合ということはそれなりに理解できているつもりであり、人間が実験において核分裂や核融合を無理やり起こすことによって、巨大なエネルギーが放射されるということはさもありなむと思う。その現象は量子論と相対性原理から物理的に証明されるということまではほぼ理解できるような気がするが、厳密な計算は出来ない。その現象は通常 of 自然現象としては起こりにくいものを実験という人間の行為を媒介にして弁証法的に生れるものであると考えられる。

註③：参照「大島康正氏解説」【VIII481】

註④：参照「哲学入門」【XI 〃】

註⑤：参照「学と生の交差点」(「求真」第23号)

註⑥：人間は論理的に常に正しく行為することができるわけではなく、行為が先行する場合が多い。生れてくること自身が既に自分の意志からではなく、気が付いた時には既に数年・十数年・何十年経過している。自覚的に行為が可能になった時、その行為は何を信じ何を証明しているのかが問われる。人は皆自覚的に行為しなければならないとは言わないが、田辺哲学では個人の行信証が重要なポイントとなる。

註⑦：これは現実の生活の中で感じられることで、それは反省の材料にして行きたいものである。

註⑧：これは個人間だけではなく、団体と団体、団体とその中の個人、国家と国家など様々なレベルの関係が未整理のまま過去を引きずっていることが多い。

註⑨：例えば資本主義と社会主義の原則は違うけれども、言論の自由を認めると統治は一段と難しくなるので、それぞれの初期段階では国の統治者は安定した支配が可能になるまで言論の自由を認めないことが多い。

註⑩：流言飛語が横行し、買収疑惑が頻繁に起こるようでは安定した社会にはならず、そのようなことが論理的に否定されるだけの根拠が明確になることが必要である。

註⑪：資本主義と共産主義の対立の構図に民族の独立の理論を加えた論理が浮上する中で、田辺は大日本帝国の思想的指導者として「種の論理」を掲げて日本民族の団結を呼びかけることになった。その延長線上で「懺悔道」に至る重要な概念である。

註⑫：太平洋戦争においての大日本帝国の敗戦という現実の中で、田辺はこの論理を掲げたが故に、精も根も尽き果てる如き苦しみのどん底を経験した。それが「懺悔道」に至る道であり、「絶対平和」を希求する精神的基盤である。

註⑬：それぞれの個人は皆持って生まれた体験の集積があり、それを離れて個人があるわけではない。自分の殻を破る必要がある場合もあるが、その体験の集積を軽んじて良い筈はない。

註⑭：今までの基本的人権の捉え方は障害者問題と重なって、どんな障害があっても人間として尊重されなければならないことで止まっていたが、そんなことは当然であり、それぞれの個人は最大限その能力を発揮すべく配慮されなければならない。そのような積極的な基本的人権の確立がこれからの時代の課題である。

註⑮：田辺は「キリスト教の弁証」の「序」の中で、「私は亡びても、この地歩は新しき思索者に一応の踏み板

たる役目をつとめるかと思う」【X17】と言っている。

- 註⑩：親の願いを受け継いだり、師の願いを受け継いだり、社訓や家訓を引き継ぐことはよくあることであるが、公や利他の精神に徹底しているかどうかは明確でないことも考えられる。時の経過によって明白になってくるともあるし、解釈の視点によっても変わってくることを配慮すべきであるから、単純に決めつけることは慎むべきである。
- 註⑪：この緊張状態をより深く理解することが社会の様々な事件をより深く理解することであり、事件の当事者に寄り添うことになり、その能力を磨くことが要請される。
- 註⑫：筆者はこれまでの人権思想を消極的人権思想と呼び、これからは積極的人権思想を求めべきであり、最大限個人の能力が発揮されるように配慮していくべきであろうと考える。
- 註⑬：絶対媒介とは絶対者（=神）に到達した観点からの表現を表す。悟りとしての絶対矛盾的自己同一の表現は西田先生の純粋経験の西洋思想的表現であるが、絶対平和も絶対無も哲学が求める究極的な世界の表現として考える。絶対還相は刻々と変わる世界そのものの姿である。
- 註⑭：普遍的な愛の実践の場は様々な困難を抱えており、誤解と攻撃に充ちている。そもそもそんな愛はありえないと考える人が大部分であろう。具体的な生の世界で感じ取られるものであるから、時々刻々の行為の問題を如何に処理するかにかかっている。
- 註⑮：行為する主体の意図は反応する周囲の空気や具体的な発言や行動によって察知する以外にない。その反応が好意的であるか懐疑的であるかによって、次の行為を考えることになるので、弁証法的な対応が求められることになる。
- 註⑯：ある出来事の直接的な関係者以外でその出来事に関心を持った人が居られたら、その人の判断が重要な視点になるなることもあるだろう。
- 註⑰：戦争や革命のような残酷な殺し合いをしないで、改革を実現する道を探すことが求められている。
- 註⑱：精も根も尽き果て絶体絶命の境地に落ち込んで自らを放棄した時に自ずから沸き起こってきた懺悔の気持ちは田辺の強靱な精神力に支えられた論理であり、何人もなしえないような力であったと筆者には思われる。自殺するか精神錯乱を起こしても不思議でないような境地である。このような論理は世に精神障害といわれるような病気に対応する力になるであろう。
- 註⑲：筆者は強靱な論理的思考が出来ない人が精神障害になったり犯罪をしたりすると考えている。その多くはその人の責任というよりも、その人が育った境遇に目を向けるべきであろう。そのような社会的配慮がこれからの社会には必要であろう。
- 註⑳：その能力は社会のあらゆる状況に対応することのできる論理的な思考である。田辺哲学を学ぶことはそのような論理的思考を育てることになるであろう。
- 註㉑：注③参照
- 註㉒：時々刻々と変わる世界そのものの展開は神の世界創造そのものであり、過ぎ去ってしまったら変えることのできない世界である。もしその瞬間に参画することができるとするならば、最善を尽くして自己の信じる方向に行為することである。その結果が間違っていたとしたら自己の無力をただ知るだけである。その世界が存在することを信じて行為することが神の世界創造に積極的に参加することになる。そこまで世界創造に参加できることを教えてくれているのが懺悔道である。田辺はそれを論理的に展開したと思われるが、そのように理解できないとすれば、それは正に発達障害かも知れないと筆者は思う。
- 註㉓：われわれ人間一人一人はみな異なった状況にあり、互いに他に代えられない存在であるから、どこまでも自己に留まり、打開するべく定められて居る。他者は参考になっても、自己は自己を生き抜かねばならない。

- 註⑩：一般に成人式という社会的な取り決めがあるが、本当の意味で一人の人間としての自覚に到達することは個人差がある。社会的な取り決めは便宜上必要ではあるが、自覚することは強制されるべきものではなく、自ずから成るものであるが、大学を卒業する頃までには、自らの判断で自立できることが望ましいと思う。
- 註⑪：懺悔道を通じて客観的普遍的な論理の確立をすることが人生の目的としての絶対平和を目指すことであると理解できないとすれば、それは一つの発達障害ではないかと筆者には思われる。
- 註⑫：この節から筆者自身の人生を田辺哲学によって解釈する作業に入る。筆者自身の人生は他の誰によっても変えられない唯一の人生であるが、同じように誰でも自分の人生を歩んでいる。それは自分自身を客観化する作業であり、場合によっては筆者にとって不都合なことでも告白する用意があることを意味している。それが主体的な判断に関係して来ることであればあるほど、その客観化の作業はそれだけ重大なことになる。懺悔道はそのような際どい問題にも関係して来る。主体的な判断を抜きにした客観主義の立場はとらないことを宣言してその作業に入る。
- 註⑬：この問題は有史以来先天的に決定されているものとして考えられてきたが、文化の発展によって人々の交流が盛んになって、様々な人生経験が有りうるものが明らかになってきた。それは一般化されてきたことが、例外を許さないという空気を作り、個人的な趣味をも取り上げようとする暴力への抗議にもなっている。この問題にもどのように対応すべきか考えてはいるが、答えが出たわけではない。これは男女の問題の根本に繋がる。
- 註⑭：男女間、夫婦間、親子間のトラブルの要因がそこまで遡ることもあり、羞恥心にも係わることであるから客観化が難しい。田辺哲学ではそこまでは踏み込んではいないが、理想型としての兄弟愛が重要なポイントになっているので、懺悔道の重要なポイントになってくるであろう。
- 註⑮：高校の生物の時間に性染色体として、男のXYと女のXXを教えて頂いたが、「創世記」(第2章21-24節)の物語があまりにも説得的であるので、異教徒としての筆者も聖書の根源性を認めざるを得ないと思っている。その上で現実の具体的な問題を考え、各人が自分で納得のできる道を探ることが大切だと思っている。
- 註⑯：悩みに充ちた辛い人生ではあったが、大学を出る頃には人生に対する根本的な姿勢ができたと思っている。その時はまだ田辺哲学に関しては全くの無知であったが、筆者の指導教官がこの上もなく田辺先生を尊敬し、田辺先生に憧れておられたことをよく覚えている。田辺先生の指導によって博士論文としての“DEUS QUATENUS”(限りの神)の思想に到達した事を筆者も我が事のように喜んでいだ。
- 註⑰：自然現象の観察は自分が関係する専門や関心によって異なっていることは当然で、それを前提にして筆者に見えている自然観を述べてみる。
- 註⑱：自然現象は常に力と力の衝突によって弁証法的に生起するのであり、絶対無即愛の方向に流れている。その方向に逆らえば自滅することになるだけで、そこでは何者も救われぬ。力と力のぶつかり合いがあっても、他者への愛と公への愛があればすべては救われる方向に展開するであろう。
- 註⑲：漫画やアニメやSF小説の世界は今日大きな飛躍をしているように思われるが、その実在感はどこから生まれてくるのであろうか。映画やテレビやビデオやパソコンやスマホが普及し、映像文化が氾濫し、人々の楽しみを誘っているからであり、それによって感性は鋭くなる代わりに思考力が減退しているように思われる。厳しい修行をして悟りを開くことなどダサイことのように思われるのかもしれない。
- 註⑳：筆者は田辺哲学がもっと研究され、もっと一般化されていたらこんな事態にはならなかったであろうと思っている。科学の有効性と危険性を田辺哲学ほど強調している哲学を筆者は知らない。
- 註㉑：社会現象もどのような視点で捉えるかは各人によって異なり、その視点によって見え方が異なってくる。ここでも筆者の関心を基本に据えて考え、関心の延長線上に見えてきたものを述べる。人は誰でも生まれ

た時から好むと好まざるとにかかわらず何等かの社会に属し、その社会の一員として生活している。しかしそこでは個人的な状況を超えた統計的な数の一つとして扱われることも多い。個人の特性と統計的な要素を如何に調和させるかは社会改革をして行く上で重要なポイントになる。

註④②：この言葉は「創世記」第9章に初めて出てくるが、ノア一族を祝福して述べられたという。聖書ではその後も一族を祝福する時にはしばしば用いられるフレーズである。そしてこの言葉はそれぞれの民族が繁栄する時の呪文のように思われる。そして21世紀に入った今の人類の状況で、このようなフレーズが適切であると言い得る様な問題があるのだろうか。今日の社会問題は神の願いにふさわしい一族の繁栄が求められているということなのかもしれない。

註④③：筆者の名前の「炫三」は役場で初めは認められなかったそうだが、辞書を持って行って認めさせたと聞いている。祖父が付けたそうだが、何かものすごい拘りがあったようで、その願いは何であったのだろうか。最近では少々気になっている。「陰陽五行説」に従ったようだが、特にその説を研究しようとも思わなかったが、何か表現しにくい本質のようなものを感じている。

註④④：領土の分捕り合戦はもはや意味のないことであり、それぞれの個人が十分に能力を発揮することができる様なシステムを考えるべきであろう。今地球上で小競り合いをしている領域は支配権を狙う我欲の現れであり、他者或は公の利益を優先する方位からは生じ得ないことである。

註④⑤：筆者は20年以上前に「徳の戦い」という著作を米子の今井書店から自費出版したことがあり、今日ますます重要な考え方であると思っている。

註④⑥：革命などのような暴力ではなく、論理的に進めることが望まれている。そのような論理の展開は田辺哲学の中にある。筆者は十年以上前に「田辺元全集」(筑摩書房)を8年かけて通読し、「求真」(第5号～第12号)で発表している。

註④⑦：カントをこよなく愛していた田辺は戦前から「実践理性批判」の究極としての恒久平和論者であった。戦争への突入だけは避けようとして民族の理想としての兄弟愛で「種の論理」を構想した。それが民族の独立心に火をつけ軍部の独走となり、太平洋戦争へ突入し、原爆投下というあってはならない悲劇を生んだ。この大矛盾の果てに苦しみ抜いた田辺は懺悔道に到達し、弁証法的に絶対平和という言葉が生まれた。平和への願いとしての力と戦争に勝たなければならないという力が真正面からぶつかり、絶対無即愛という絶対還相の懺悔道の方位が生まれた。従って絶対平和を目指す弁証法的行為の方位とは行為する当事者の行為する瞬間の一步手前の意識の方位である。

註④⑧：この時は既に大学を定年退職して北軽井沢の大学村に居を移して一人の日本人として発言している。

註④⑨：性善説を優先することを公が宣言しても、すべての人が機械的にそのように考えるわけではないと思われるので、立法上には様々な配慮も当然必要になると思うが、何か根本的な改革が必要な事だけは明らかであろう。

註④⑩：特に北朝鮮や韓国や中国の人々からは被害者的な立場で批判されるのは仕方ないことのように筆者には思われる。その辺の懺悔が十分でなかったことがいまだに尾を引いていることは遺憾なことである。そしてそのために辛い思いをされて居る方々が居られるのは何等かの神の計らいなのかもしれない。